『日本語学論集』第七号　二〇一一年三月

三巻本『色葉字類抄』重点部の研究

藤本　灯

一．はじめに

院政期に成立した三巻本『色葉字類抄』の内部は語の意味や外形によって二一部に分類されており、一四番目に位置する「重点部」には、「一々」など、所謂「畳語」が収められている。重点部については山田俊雄氏、町田亙氏、村井宏栄氏に御論稿があるが［注1］、用例調査など基礎研究の余地が十分残されている。本稿では、他の古辞書との比較調査、また中世の各種文献に用いられた畳語についての調査を通して、字類抄の編纂方針、また古辞書の意義分類の変遷に言及することを目的とする。

二．『色葉字類抄』重点部の概観

三巻本『色葉字類抄』重点部イ～ス篇には一五七語が収録されている。

以下、重点部に収録された全語を掲出（いろは）順に示す。前田本の欠ける部分は黒川本を用いた。また、踊り字の種類は原形を保存して示すよう努めた。

1　猗々　イヽ／ウルハシ
2　殷々　インヽヽ／サカリナリ／車音ー鳴
3　隠々　インヽヽ／車音
4　一々
5　家々
6　色々
7　了々　イトヽヽ
8　録々　ロクヽヽ／ウナツキアハス
9　轆々　ロクヽヽ／不絶義也
10　蓐々　ハイヽヽ
11　皤々　ハヽ／シラク／鬢眉白皃
12　婆々　ハヽ／舞皃
13　苞々　ハウヽヽ／草木茂也

14 茫々 ハウ、、／水色也
15 陪々 ハイ、、
16 番々 ハン、、
17 日々 ニチ、、
18 眇々 ヘウ、、／ハルカナリ
19 淼々 ヘウ、、水、、也／大水也／ハルカナリ
20 變々 ヘン、、
21 片々 ヘン、、
22 戸々 ヘ、
23 處々 トコロ〳〵
24 往々 同
25 年々 トシ〳〵
26 時々
27 轉々 ト、ロク
28 轟々 同／車ーー
29 鼕々 トウ、、／叩門皷等聲
30 度々 ト、
31 遲々 チ、
32 重々 チウ、、
33 嫡々 チヤク、、、
34 略々 リヤク〳〵
35 領々
36 離々 リ、／苗名
37 往々 ワウ、、
38 各々
39 嗷々 カウ、、
40 啞々 カウ、、
41 咬々 〈フ〉カウ、、
42 赫々 カク、、
43 峨々 カ、
44 颯々 カ、
45 夜々 ヨナ、、
46 世々 ヨ、
47 代々 ヨ、
48 時々 ヨリ〳〵
49 代々 タイ〳〵
50 段々 タン〳〵
51 堂々 タウ〳〵／美容儀也
52 蕩々 タウ〳〵／巍々ーー
53 了々 レウ〳〵
54 連々 レン〳〵
55 戀々 レン、、
56 孫々 ソン、、／子々ーー
57 所々
58 念々 ソウ、、
59 楚々 ソ、／衣裝鳴音也
60 念々 ネン、、
61 年々 ネン、、
62 内々 ナイ、、
63 軟々 ナユ／ー衣
64 落々 ラク〳〵
65 云云 ウン〳〵／ツ、ヤク
66 蔚々 ウツ〳〵／タカシ
67 内々 ウチ〳〵
68 唯々 ヰ、
69 後々 ノチ〳〵
70 恐々 クヨウ〳〵
71 巍々 語壽反／クヰ〳〵／高大皃也
72 開〔関〕々 クワン〳〵／欥／クフ〳〵／和音也
73 悅々 クヰヤウ〳〵／ホル

74 句々 ク、
75 區々 ク、
76 緩々 クワン〳〵
77 匋(匈)々
78 顆々 波高皃
79 喁々 聚皃
80 潢々
81 騤々 馬行皃／クヰ〳〵
82 倦々 クハン〳〵／忠也
83 兢々 敬懼皃／クヨウ〳〵
84 煌々 火壯
85 夜々 ヤ、
86 湯々 ヤウ〳〵／意氣ー
87 様々 ヤウ〳〵
88 洋々 ヤウ〳〵／タ、ヨフ
89 泱々 ヤウ〳〵／タナヒク
90 漫々 マン〳〵
91 分々 フン、、
92 歩々 フ、
93 尅々 コク〳〵／時々ー
94 戸々 コ、／門々戸ー
95 後々 コ、
96 心々 ココロ〳〵
97 聲々 コエ〳〵
98 事々 コト〳〵
99 營々 エイ、、
100 緣々 エン、、
101 曳々 エイ、、／推舟聲也
102 嚶々 エウ〳〵／虫音也
103 朝々 テウ〳〵
104 轉々 テン〳〵
105 條々 テウ〳〵
106 蘿々 テウ〳〵／タヲヤカナリ
107 泥々
108 嚶々 アウ／鳥音也
109 澈(澈)々 匹蔽反／アソフ／魚游水也
110 蛩(蛩)々 アシトテヒク
111 細々 サイ〳〵
112 在々 サイ〳〵
113 散々 サン〳〵
114 早々 サウ〳〵
115 察々 サツ〳〵／明々ー
116 草々 サウ〳〵／サウサシ
117 雑々 サウ〳〵／サマ〳〵
118 歳々
119 作々 語點ー々
120 近々 キン〳〵
121 謹々 キム〳〵
122 凞々 キ〳〵／タノシ
123 兢々 キヨウ〳〵
124 軽々 キヤウ〳〵
125 狷々 キン〳〵／ニカメリ
126 努々 ユメ〳〵
127 夢々 ユメ〳〵
128 面々 メン〳〵
129 明々 メイ〳〵
130 生々 シヤウ〳〵／ー世々
131 鏘々 シヤウ〳〵／タカシ
132 種々 シウ〳〵／クサ〳〵
133 秦々 シン〳〵

134 膓々　シヤウ〳〵／高也
135 湯々　シヤウ〳〵／流也
136 嘯々　シウ〳〵／鳥鳴声
137 啾々　シウ〳〵／雀声
138 子々　――孫々
139 孜々
140 遠々　エン〳〵
141 蜜々　ヒツ〳〵
142 日々　ヒヽ
143 門々　モン、、
144 文々　モン、、
145 世々　セヽ
146 済々　セイ〳〵／多威儀皃／多也集也
147 漸々　セム〳〵
148 少々　セウ〳〵
149 切々
150 説々　セツ〳〵
151 凄々　セイ〳〵／霎行皃
152 寂々　セキ〳〵／シツカナリ
153 蕭々　セウ〳〵／ヒユ
154 戰々
155 前々
156 惴(惴)々　戌睡反／憂心也
157 蠢々　尺尹反

『色葉字類抄』における重点部語彙の特徴として、一つには原則として踊り字が用いられていること［注2］、もう一つには語の構成漢字数が二字であることが挙げられる。そのため「子々孫々」等、四字以上から成る熟語は見出し語としては立てられず、注記中に「138子々　――孫々」等として示唆されるのみである。

また、以下の例のように、同じ文字列を持ちながら二箇所に重複掲出のあるものが一三組二六語あり［注3］、音訓の両形を示したものや音読表記の揺れに起因する例が認められる。

① 27 轉々　トヽロク　　104 轉々　テン〳〵
② 45 夜々　ヨナ、、　　85 夜々　ヤヽ
③ 46 世々　ヨヽ　　144 世々　セヽ
④ 83 兢々　クヨウ〳〵　　122 兢々　キヨウ〳〵

重点部語彙一五七語のうち漢語(音読語)は一三二例、和語(訓読語)は二五例であるが［注4］、必ずしも和語と対になる音読語が立項されているとは限らず(例えば「28 轟々」は音読語としては立項されていない)、また和語に与えられた訓の形式が畳語になっているとも限らない。

27 轉々　トヽロク　(ト篇)
28 轟々　同／車――　(ト篇)
109 瀲々　匹蔽反／アソフ／魚游水也　(ア篇)
110 蛩々　アシトテヒク　(ア篇)

次の例のように、注文中の意義注の如き訓が文選読みの訓読部分に用いられた実例のある場合も多い。

2　猗々　イヽ／ウルハシ　「猗猗トウルハシウシテ」（九条本文選）
11　皤々　ハヽ／シラク／鬢眉白皃　「皤皤トシラケテ」（同）
73　怳々　クキヤウ〳〵／ホル　「怳怳トホレテ」（同）
88　洋々　ヤウ〳〵／タヽヨフ　「洋洋トタヽヨテ」（同）
134　膓々　シヤウ〳〵／高也　「膓膓トタカキニ」（同）
135　湯々　シヤウ〳〵／流也　「湯湯トナカルヽヲ」（同）

文選読みの語をこのように掲げる姿勢に関しては、字類抄畳字部訓読語とも共通する現象であるが、特に前掲27以下のように漢語に対応する和語の訓を独立させて立項している場合には、音引き辞書としての有用性に係わる問題となるだろう［注5］。また、前掲134や135の如き記述態度についても、文選読みと意義注の境界が曖昧な場合として注意が必要である。

更に、仮名音注が、漢音で示される場合と呉音で示される場合がある。

〈呉音〉
17　日々　ニチヽ
62　内々　ナイヽ
124　軽々　キヤウ〳〵

〈漢音〉
129　明々　メイ〳〵
141　蜜々　ヒツ〳〵
152　寂々　セキ〳〵／シツカナリ

重点部に限らず字類抄全体の特徴として仮名音注に漢音と呉音が混在していることは先学の御指摘通りであるが、一見漢詩文作成の為の語の集合と思われるような重点部という特殊な部においてもこの現象が該当し、また反切や平仄（声点）も殆ど付されていない［注6］、語の典拠を示さない、というような状況を鑑みれば、字類抄が漢詩文作成の為にこのような部を設けた訳でないことは明らかである。それでは字類抄の編纂者はどのような意図を以て重点部を採用したのであろうか。まず次節において、他の古辞書との対比により、字類抄重点部の特異性を眺めたい。

三、古辞書における畳語

「重点部」の呼称は「いろは字類抄」諸本（節用文字、色葉字類抄、世俗字類抄、伊呂波字類抄）の他、字類抄と関係の深いとされる『平他字類抄』や『平安韻字集』には認められるものの、字類抄以前に本邦で成立した国語辞書の中では『新撰字鏡』にのみ見出される稀少な部である［注7］。（ただし、『新撰字鏡』と字類抄の直接の影響関係は無いこ

とが既に明らかとなっている)。畳語を示す「重点」の語は現代の漢和・漢語辞書にも見えず、「畳文」「畳辞」「畳字」「重言」「重字」「複語」等が見られるのみである[注8]。字類抄以降に成立した国語辞書で畳語を収録する場合でも、節用集まで下ると「言語」「言辞」「言語進退」等の部門[注9]に吸収され、「重点部」として独立した形式を取らなくなり、現代の一般的な国語辞書に至っている。ただし、中世以降の一部の作詩参考書の類においては「複用門」の名により畳語を含む一群の語彙を扱う場合がある。

本節では、特徴的な畳語の掲載形式を持つ書[注10]、また節用集について述べる。

◎『作文大体』

平安時代に成立し、増補改編された諸本が残っている。群書類従本に「文章有十二對〈詩賦雑筆等同用之〉」とあり、その第六に「畳對」とある[注11]。「悠々眇々、迢々濟々」に始まり「池色溶々藍染水、花光焔々火燒香」まで、計三九対の畳語を掲げる。ただしこの箇所は古態を残す観智院本(鎌倉時代写/『平安詩文残篇』所収)には無く、それ以降に増補された部分であることが分かる。

(天理図書館善本叢書『平安詩文残篇』/八木書店/1984)
(群書類従本/1893)

◎『童蒙頌韻』

成立は天仁二年(1109)であり、最古の善本は室町時代に書写されたものである。静嘉堂文庫本・群書類従本の序文には「凡二千九百五十五言除重點三十七字」とあり、また韻目に「東一　百十八字除重點二字」等の表示がある。東韻には一二〇字が収録され、このうち「芃々」「沖々」の二語が所謂畳語に当たるため、ここで「重點」とあるのは踊り字を示しているものと理解できる[注12]。

(尊経閣善本影印集成25-2/2000)
(古辞書叢刊/1976)(群書類従本/1893)

◎『消息詞』

菅原為長(1158～1246)撰。書簡、また鎌倉幕府の事務文書用に供されたものとも推測される。巻末に「重點」の部門を設け、「早々〈サウ〳〵〉」「遅々〈チ〳〵〉」から「色々〈イロ〳〵〉」「漸々〈セン〳〵〉」まで畳語六〇語を収録する。多く字類抄重点語彙と一致しており、影響関係が認められる。(『消息詞・書状文字抄』(天正一五年(1587)奥書)/古辞書叢刊/1973)

◎畳語専用辞書～『畳字訓解』、『増補枝葉訓解』[注13]

国語辞書として畳語のみを収録した部門が消滅する一方で、延宝九年(1681)に『畳字訓解』(白雲居士編)、元禄九

年(1696)に『増補枝葉訓解』(西村有隣編)が刊行され、畳語ばかりを集めた特殊な辞典として注目される。ここでは既に「畳字」の呼称が使用されている。『畳字訓解』の自跋に「庶幾為學雕蟲之一助也」とあることからも、詩作の為に編まれたことが窺える。

◎『対類』

管見に入った書に『對類』(漆桶萬里編)がある[注14]。巻首題「會海對類疊字」に続き九丁にわたり八七二語の畳語を掲載しており、天文・地理・時令等一六門に収録した畳語をそれぞれ平仄により前後に分かつという体裁を持つ。

◎『聚分韻略』系統の韻書

『聚分韻略』は韻書であるが、独自に一二門の意義分類が施されており、「虚押・複用の二門などは特に珍しいようである」[注15]とされる。『聚分韻略』以降の韻書の中にはこの影響下で「複用門」の名称と分類を用いるものが出現する。例えば、国立国会図書館蔵『略韻』(室町時代末期頃写)、『伊呂波韻』(寛永一一年(1634)刊)、『和語略韻』(元禄一一年(1698)刊)等は「複用門(あるいは「複」とのみ表示)」を採用している。「複用門」は畳語のみならず、詩文中の押韻や対句に必要となる双声、畳韻を形成する語をも収録しており(次項参照)、字類抄の「重点部」とは性格が異なるものの、畳語を検索する目的には適っている。

◎『和漢初学便蒙』『和漢新撰下学集』

『和漢初学便蒙』(元禄八年(1695)刊)と『和漢新撰下学集』(正徳四年(1714)刊)は異名同書。この書の内容には『下学集』や『易林本節用集』からの影響が見られるが、『下学集』等には見られない「切韻門」「詩賦門」(巻三)、「音律門」「詠歌門」(巻四)等がある。「切韻門」中『聚分韻略』の一二門の説明があるうちに「複用門」も含まれており、次のようにある。

複用門(フクヨウ)　怔忡(セイチウ)、濛々(モウく)[注16]、朦朧(モウロク)ナドヽ連屬(レンゾク)シテ複用ユベキ字類アリ(巻三・二五オ)

また「詩賦門」には作詩の技法を載せ、対句を解説する中で「漠々ノヲドリ字ニ陰々ノヲドリ字を對シ」(巻三・四六オ)と畳語に言及している。踊り字については更に「詩(シ)大塊之踊字(タイクワイノヲドリジ)」(巻三・五〇ウ)として「颯々(サツく)」(風)・「荏苒(ニンセン)」(日)・「萠(キザス)」(草)等、意義分類されて示されている。これらのすべてが踊り字を伴う語ではないことは、『聚分韻略』系の「複用門」と同様である。

(『京都大学蔵　大惣本稀書集成　第十巻』(臨川書店／1994))

◎祐徳稲荷神社蔵『伊露葩字』

室町末期の書写。『平他字類抄』に近い形態を持ち、『聚分韻略』の漢字注に依拠するとされる。イ～ス篇をそれぞれ平仄に分類する他、「両音字」・「半読字」（「縦　タトイ／トモ」等八字）・「重点平」（蒼々　天」等一九字）・「重点仄」（「嶋々　秋」等一二字）・「地理重点」（巍々　山」等平声二〇字、「蕩々　水」等仄声一九字）の部を作る。なお、『平他字類抄』（江戸中期以降書写）では「平他同訓字」の中に「重点」の項目を設けており、更に「随讀平他字」の後に所謂「複用門」の如き語句一覧を「日・月・星～苔・柳・鬻」に分類して載せる。

（『古辞書研究資料叢刊』第二・三巻／大空社／1995）

◎節用集　諸本

『節用集大系』全一〇〇巻(大空社／1993-1995)を対象に、各辞書において畳語の語数が充実しているセ篇の比較調査を行ったところ、殆どの書において〇～六語の畳語しか掲載されておらず(三巻本字類抄では冒頭に掲げたとおり一一語が収録されている)、それ以上の語数を有するのは以下の四書のみであることが分かった。

①「大日本永代節用無尽蔵」（第七五・七六巻／嘉永二年刊／一四語）

②「字引大全」（第五三・五四巻／文化三年刊／一三語）

③「倭節用集悉改大全」（第六三巻／文政九年刊／一一語）

④「大成正字通」（第四一巻／天明二年刊／九語）

この内、注目されるのは②「字引大全」である。言語門末尾に雅語と俗語を設けるが、「芊々」「閃々」「戦々」「緘々」「悽々」「萋々」「栖々」「戚々」「寂々」などが「雅」に分類されており、特に「戦々」は色葉字類抄に掲載された語であるが、節用集大系所収の諸本ではこの書のみに現れる。ただし、節用集類全般に関して、畳語は言語・言辞門等に吸収されており、その掲載も不連続に行われているため、畳語のみを抽出する作業は困難であり、そのような作業も想定されていないことが分かる。更に、同じ調査の結果、全一〇〇巻一一三書中で頻出の畳語は「漸々(八八書に出現、以下同)」「切々(五五)」「済々(三一)」「少々(三〇)」「節々(二二)」といった実用の語に集中しており、「凄々」「寂々」「蕭々」などは殆ど掲載されていないことが分かった。すなわち節用集がその名の通り日用語を掲載していることや、抑も言語門が「言語(げんきょ)と有下にはつねにいひあつかふことばの字(じ)あり言辞(ごんじ)と有も同じ」（第二七巻）に示されるような語集合として想定されていることからも、色葉字類抄重点部の語とは、例え一部重複語があったとしてもその全体

像がかけ離れたものであることは明らかなのである[注17]。なお、室町時代～江戸時代初期に刊行された「古本節用集」類の言辞・言語・言語進退門のセ篇ではいずれも「漸々」「切々」「済々」など実用的な畳語、しかも五語以内の掲載しか無かった。

以上、極僅かではあるが中世～近世の辞書類における畳語の取り扱いを眺めた。結果として、ある程度連続したまとまりとして畳語を収録している辞書で、「重点」「複用」「畳字」の用語を採用している書は、悉く作詩作文参考書としての性格が強いものであることが判明した。韻書の場合は当然声調を伴った形式で語が表示されているため、先に述べた通り、字類抄の重点部とは性格を異にするのであるが、国語辞書史上、延長線上に存在するとされる『節用集』など一般の国語辞書で畳語が軽視されている(村井氏(2002)の述べるところの「分類項目化されていない」)状況と比較すれば、字類抄「重点部」と『聚分韻略』系の「複用門」とは部門の外形が近似していると述べても誤りとは言えないだろう。しかし、これらと字類抄重点部の存在理由・内容とに連続性があるかという疑問については改めて検討する必要がある。確かに字類抄所収語の中には重点部に限らず漢詩文特有の語も多く存在するが、そうであるからと言って漢詩文を作るための第一の書として字類抄を挙げる利用者を想定するには、多少困難があるように筆者には感じられる。また、『聚分韻略』などは韻書として出発しながらも改編されるに従って節用的性格を兼ね備えるようになるのであるが、反対に三巻本『色葉字類抄』では、一般の文章で用いられるような普遍的な語を根幹としつつ、修辞を凝らした文章にも用いられ得るような語句を補充していったようにも窺える。

次節では、当時の書記世界の需要や辞書の享受層に照らして重点部語彙を考える。

四．用例

『色葉字類抄』に収録された語彙の用例については従来、古記録、古往来、漢詩文集、訓点資料を中心に採集が進められ、その結果、古記録等に使用する日常的な用語を中心として、中には漢文訓読特有の語や漢詩作成のための語も存在する、という認識に収まりつつある。これは、山田孝雄氏が「色葉字類抄の如きはその目的は漢詩文を作らむ為に用ゐるにあらずして実に当時実用の国文を草する人の用に供するにあらずばあらず」[注18]と述べられた内容に大きく齟齬しない結果であると言うことができるだろう。しかし、殊「重点部」に限っては、その外形からも先ず漢詩

文を彷彿とさせ、すぐさま実用的、日常的という概念とは結びつかないように思う。また前節で概観したように、字類抄以外に重点部に類する部門を持つ書はすべて韻書や作詩指南書であり、このことからも、字類抄という辞書が一体どのような目的で編まれたのか、重点部語彙の当時の用法から再考する価値があるだろう［注19］。

三巻本字類抄に収録された重点部語彙の用例を古記録に求めたところ［注20］、多くの書に亘って頻繁に用いられる語の上位を占めるのは、「日々」「色々」「近々」「蜜々」「前々」「各々」「代々」「連々」「済々」「事々」「面々」「早々」「一々」「遅々」「度々」「少々」「云々」「所々」「條々」「種々」「恐々」「時々」等の語であった。これらの語は重点部語彙の中でも比較的日常的に用いられた語と認定することができるであろうし、他部の日常語とともに字類抄の節用的性格を裏付ける証拠と成り得る［注21］。その一方で、「殷々」「峨々」「蕩々」等のより修辞的な語の用例は古記録類には見出し難いという側面も指摘できる。

しかして、重点部語彙の大部分を占める「音読みの語」の用例を中古・中世の本邦の漢字文献に求めると、「一々」「日々」のように広範な分野で用いられた語を除けば、その使用場面はある一つの特徴を持つことが明らかとなった。すなわち、重点部語彙は、「雲眇々、水茫々」（本朝文粋巻一）に代表されるような対句表現に多く見られ、またその対象が必ずしも正格の漢文に限定されないということである。これらは先に示した日常語のように多くの書で頻繁に用いられる訳ではないが、使用語彙としての需要を証明するものである。対句に用いられた例を中心に、以下に数例を示す［注22］。（三巻本字類抄重点部所収語に傍線を付す）。

・「殷々タル梵音ハ、本地三身ノ高聴ニモ達シ、玲々タル鈴ノ聲ハ垂迹五能ノ應化ヲモ助クラントソ聞ヘケル」（太平記巻25）

・「朕以眇々之身［弓］、為元々之首［利］、日慎一日［天］、雖休無休［久］、年當十年［礼利］、不可不恐［須］」（民経記・寛喜三年一〇月）

・「地勢幽奇ニシテ、風流勝絶タリ。東ニ望メバ則チ煙波之眇々タル有リ。湖水真如之月ヲ浮カベ、西ニ顧ミレバ亦雲峯之峨々タル有リ。山嵐実智之花ヲ散ズ」（地勢幽奇、風流勝絶、東望則有煙波之眇々、湖水浮真如之月、西顧亦有雲峯之峨々、山嵐散実智之花）（江都督納言願文集巻第二・金剛寿院供養願文）

・「念々歩々、先后登覚之道（に）追随シ、世々生々、新仏託胎之家ニ親近セン」（念々歩々、追随於先后登覚之道、世々生々、親近於新仏託胎之家）（江都督納言願文集巻第五・右府室家為先后被供養堂願文）

・「齢八十強（アマリ）、鬢髪皤々」（拾遺往生伝・下10ウ）

・「彼ノ國蒼波満々トシテ、青天悠々（イウイウ）タリ」（後拾遺往生伝・上4オ）

・「時々合遺、數々唱念」　（後拾遺往生伝・中8ウ）
・「聲々不絶、願安養之浄刹、念々不休、其聲漸微」　（後拾遺往生伝・30ウ）
・「雲海沈々、風波寂々」　（後拾遺往生伝・下20ウ）
・「有験道場往（トヒロケ）々参詣」　（三外往生記38オ）
・「一々見已、念々恭敬」　（本朝新修往生伝34ウ）

対句からはすぐさま漢詩文が想起されるが、『色葉字類抄』全体の性格は、無論、作詩専用の『聚分韻略』のような辞書とは一線を画している。しかし、漢詩文はもとより、願文集や往生伝、軍記物、また古記録の中にも要請があったことは、『色葉字類抄』が、「厳密な押韻を必要としない、柔軟な表現の中での対句に用いられ得る畳語を探すための手段」として「重点部」を設けたとの想像に沿う調査結果である。

・三巻本『色葉字類抄』重点部特有語

最後に、色葉字類抄諸本にはそれぞれ重点部が設けられているが、各本にしか見られない特有語の数を調べたところ、『節用文字』六語、二巻本『色葉字類抄』二語、三巻本『色葉字類抄』一四語、二巻本『世俗字類抄』四語、七巻本『世俗字類抄』一八語、十巻本『伊呂波字類抄』一語という結果になった。左に、本稿の中心である三巻本『色葉字類抄』の特有語を掲げる。

9　轆々　ロク、、／不絶義也　（ロ篇）
15　陪々　ハイ、、　（ハ篇）
16　番々　ハン、、　（ハ篇）
36　離々　リ、／苗名　（リ篇）
77　匈々　（ク篇）
78　顆々　波高皃　（ク篇）
79　喁々　聚皃　（ク篇）
80　潢々　（ク篇）
81　駸々　馬行皃／クキ〳〵　（ク篇）
82　倦々　クハン〳〵／忠也　（ク篇）
83　兢々　敬懼皃／　クヨウ〳〵　（ク篇）
84　煌々　火壮　（ク篇）
89　泱々　ヤウ〳〵／タナヒク　（ヤ篇）
156　惴々　戌睡反／憂心也　（ス篇）

ここで注目されるのは、ク篇に連続して掲載された畳語（77～84、黒川本所収）である。これらは「修辞的」と括ることのできる語の中でも特に保存色の強い語群であり、異本における特有語には無い一面として、ここに指摘しておく。

五．考察

従来『色葉字類抄』は、貴族の高度な文筆活動に供する

ための「書くための字書」という特色が強調されてきた。しかし、編者の人物像の詳細が未詳であることからも、「何を」書くのかという対象については様々なレベルの文章が想定され、字類抄前後に成立した書物から幅広く用例採集が続けられてきたのである。

本稿では三巻本『色葉字類抄』の重点部語彙を中心として調査を行ったが、その結果、日常的に用いられる平易な語の収録が見られる一方で、やはり漢詩文特有の語も少なからず保存される状況が確認された。しかしこのことは、ただ重点部の雑然とした性格を物語るのではなく、重点部語彙という特殊な語群の採録が、正格な漢文という枠組みを越え、和化漢文や和漢混淆文において使用されることも射程に入れていたことを示唆しているのである。すなわち、字類抄以前には駢儷文等で使用された佳句という位置付けのある語であっても、その採録の目的は、語の保存という面と同時に、新しい文学への応用という段階を想定するものではないかと筆者は考えるのである。このことは、『色葉字類抄』がイロハ順排列を採用したことなどから古い格式に捉われない姿勢が窺えることとも、また平安時代末期の漢文学の衰退や、往生伝や説話集等の庶民をも対象とした唱導文学の台頭といった社会的な現象とも符合する。『色葉字類抄』が将来書かれる文章を予想して作成された辞書であるとすれば、現代の国語辞書に通じる性格を見ることのできる最初の辞書と位置付けることができるだろう。

また辞書史における重点部という側面では、近世に至って、一般庶民の生活に有用な辞書が求められたため、大部の国語辞書の中でもこのような畳語のみを集めた部門が消滅していき、一方で畳語専用の『畳字訓解』などの出現に繋がったと考えることができるのではないだろうか。

［注］

1　山田俊雄「平家物語の語彙・用字法」（『講座解釈と文法』5／1959）
町田亘「『色葉字類抄』所収語に関する一試論――三巻本重点部の語彙を中心に」（「立教大学日本文学」87／2001）
村井宏栄「『色葉字類抄』重点門の項目化」（名古屋大学日本語学研究室「過去・現在・未来」／2002）
村井宏栄「「畳字」の周辺」（「名古屋言語研究」創刊号／2007）

2　中には「云云」のように踊り字を用いない例や踊り字が省略される例も含まれるが、「原則として踊り字を用いる」という前提は認められるだろう。ただし、踊り字を用いていても重点部以外に収録されている語は名詞を中心に多々ある。

3　ただし、「85　湯々　ヤウ〳〵／意氣――」と「135　湯々　シヤウ〳〵／流也」とあるのは前者が「陽々」あるいは「揚々」の誤りである可能性が高いため、含まない。左に一三組二六語を掲げる。

〈音訓ともに立項するもの〉

「53　了々　レウ〳〵」　「7　了々　イト、、」
「17　日々　ニチ、、」　「142　日々　ヒ、」
「94　戸々　コ、」　「22　戸々　ヘ、」
「37　往々　ワウ、、」　「24　往々　同（トコロ〳〵）」
「61　年々　ネン、、」　「25　年々　トシ〳〵」
「85　夜々　ヤ、」　「45　夜々　ヨナ、、」
「144　文々　モン、、」　「46　世々　ヨ、」
「49　代々　タイ〳〵」　「47　代々　ヨ、」
「62　内々　ナイ、、」　「67　内々　ウチ〳〵」
「95　後々　コ、」　「69　後々　ノチ〳〵」

〈二種の訓を載せるもの〉

「26　時々」（ト篇）　「48　時々　ヨリ〳〵」

〈二種の音を載せるもの〉

「83　兢々　敬懼皃／クヨウ〳〵」「123　兢々　キヨウ〳〵」

〈音と畳語形式でない訓を載せるもの〉

「104　轉々　テン〳〵」　「27　轉々　ト、ロク」

4　「63　軟々　ナユ／ー衣」（ナ篇）は音読語に数えた。節用文字に「ナン、、」の音注がある。

5　藤本灯「三巻本『色葉字類抄』畳字部に収録された訓読の語の性質」（「訓点語と訓点資料」124／2010）参照。

6　声点を漢字に付したものが一六例、仮名音注に付したものが一例（94）、和訓に付したものが一例（110）ある。以下に示す。（ただし踊り字に付された声点の軽重は実際には判別不能である）。

2　殷々〔平軽〕　イン、、／サカリナリ／車音ー鳴
11　皤々〔平〕　ハ、／シラク／鬢眉白皃
12　婆々〔平〕　ハ、／舞皃
29　蓼々〔上上〕　トウ、、／叩門鼓等聲
39　嗷々〔平濁平濁〕　カウ、、
44　颯々〔平〕　カ、
94　戸々　コ、〔上上〕／門々戸ー
102　嚶々〔平〕　エウ〳〵／虫音也
104　轉々〔平平濁〕　テン〳〵
105　條々〔去濁去濁〕　テウ〳〵
106　褒々〔上濁上濁〕　テウ〳〵／タヲヤカナリ
110　蛩（蚤）々　アシトテヒク〔平平平上上平〕
134　牓々〔平平〕　シヤウ〳〵／高也
135　湯々〔平軽平軽〕　シヤウ〳〵／流也
143　門々〔平平〕　モン、、
144　文々〔去上〕　モン、、
151　凄々〔平平〕　セイ〳〵／雲行皃
152　寂々〔入軽〕　セキ〳〵／シツカナリ

7　和訓の頭音に依って排列された語（訓読みの語、「家々」（イ篇）等）の漢字に声点が付された例は無い。ただし字類抄全体を見ると、「鼻（ヒ）平声俗／ハナ」（ハ篇）の如く、訓読みの語として立項されながら、声調を示す例がある。天治本の「重点第百五十八」に三七四語、享和本・群書類従本（抄本）の「重点部百六」に各一〇語の畳語が収録されている。

8 「重点」の語は和文では『蜻蛉日記』に見られる。（以下引用）
そのふみのはしに、なを〳〵しきてして、「あらず、こゝには〳〵」とぢうてんがちにてかへしたりけんこそ、なをある（まじけれ）。（宮内庁書陵部本蜻蛉日記（笠間影印叢刊／1982）下・八四頁）

9 『塵芥』等、「態芸門」に畳語を収録するものもある。

10 『作文大体』『畳字訓解』『和漢新撰下学集』の内容については村井氏（2002・2007）に言及がある。

11 『作文大体』の流れを汲む『文筆問答抄』にも十二対の一として「畳対」が挙げられている。また、『文鏡秘府論』は「賦体対」の一として「重字」「畳韻」「双声」等を挙げる。

12 ただし、実際には踊り字は計三六字あり、総字数や他の韻目部分に表示された数字にも実数との齟齬が認められるが、計数の誤りとして処理しても問題は無いであろう。

13 『畳字訓解』（太平文庫56／太平書屋／2006）、『増補枝葉訓解』（東京大学国語研究室所蔵版本）

14 『国書総目録』は、国会（亀田文庫）・東北大（狩野文庫・寛政四（1792））の写本及び彰考館文庫旧蔵版本（現存せず）を載せている。今回は東京大学国語研究室所蔵黒川文庫の一書である、貞享二年（1685）三月刊記を持つ版本を参照した。

15 『聚分韻略の研究』（奥村三雄／風間書房／1973）五二頁

16 本稿内で、引用原文の漢字の振仮名部分における「くの字点」を平仮名の「く」で代用した場合がある。

17 ただし山田忠雄氏（「節用集と色葉字類抄」（『本邦辞書史論叢』所収／三省堂／1967）などによって詳細な調査が行われており、近世の節用集類が字類抄の影響を受けていることは明らかである。

18 『国語学史』（賓文館／1943）一五四頁。

19 例えば『詩経』には大量の重点語彙が用いられているが、字類抄がこれらを網羅的・体系的に採取した形跡は見られない。

20 東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」を利用した。

21 ただし、この辞書の享受層が平易な語の表記を辞書に求めたかという別の問題もある。

22 『太平記』（日本古典文学大系）、東京大学史料編纂所「古記録・古文書フルテキストデータベース」、『江都督納言願文集』（六地蔵寺善本叢刊／1984）、『往生伝集』（真福寺善本叢刊／2004）の本文を使用した。なお、『江都督納言願文集』の書き下し文は六地蔵寺本に加えられた返点により筆者が作成したものであり、原文を（　）で示した。

［付記］
本稿は、日本語学会二〇一〇年度春季大会（於日本女子大学）の発表原稿に加筆修正を施したものである。

（ふじもと　あかり　大学院人文社会系研究科　博士課程四年）